仏祖の慧命を生きるには　わが身と心ととのえて
一人一時の只管打坐　たゆむことなくつとめよと

同行

平成24年９月１日
第３７号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長　岩館祖芳
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）　亀谷隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

県南・中央大会の盛会を祈って!!

出来栄えみごと　県北大会

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長　岩館祖芳

「イイスナお寺さんは涼しくて。」「お陰さんで。寒い冬さんからのごほうびダガモ!!。」いとも自然な会話もドコヘヤラ。タイの坊さんの衣姿を夢見ております。お寺ですらこの有り様。皆様には大変な毎日かと存じます。

ところで、私の不手際から、年当初の「同行」発行せずじまいとなりました。真に申し訳なく、ただただお詫び申し上げます。

さて県北大会。振り返って、大成功だったと思います。元より、師範・詠範の方々の献身的なお支えがあったればであり、加えてご寺院、ご寺族の梅花に対する熱意が、宗務所様の願い通りの花を開かせたものと思います。何にも増して嬉しかったのは、登壇各講の心意気でした。去年までの奉詠が「んーん?」だとすると、今年は「おー!!。」お唱えに、所作、鈴鉦に、はっきりと去年を越えた、深い練習のあとがよみ取れたスバラシイ（ペンが勝手に走りました）お唱えでした。真剣な所作、唱え終わった時の微笑みはそのまま、菩薩のお姿でした。感動の実を結ばせた大会でした。

十月十四日は中央・県南の大会。秋田県梅花史上、初めて大仙市で開催されます。梅花流に携わる者が等しく待ち望んだ県南会場です。つきましては、当該地域のご寺院様ご寺族様には、一人でも多くの檀信徒と共にご来会賜り、梅花との触れ合いを頂ければと懇願申し上げ、大会の成功を冀い、ご挨拶とさせて頂きます。

合掌

平成23年 梅花流 県南・中央 奉詠大会に参加して

蒼龍寺 寺族 佐藤 文

例年になく涼しい秋晴れに恵まれた九月四日、由利本荘市西目町公民館「シーガル」に於いて梅花流秋田県奉詠大会が開催されました。

向かう車中では登壇曲を練習しながら和気藹々とした雰囲気でおりましたが、会場に到着するや否やその雰囲気に呑まれたのか、皆の緊張はすでに最高潮へと。その厳かな中での第一部開会式は「秋田県梅花講の歌」を全員で声高らかに歌いあげ幕を閉じました。

開会式が終わるといよいよ第二部、登壇奉詠です。私たち第一教区の登壇は一番最初で必要以上に緊張しましたが、皆で声を掛け合い励まし合い満足の奉詠となりました。また他所の講員さん達の堂々たるお唱えに難解な特別所作も綺麗に揃い素晴らしかったです。こうした大きな大会に参加すると色々な方の声を聞く事が出来、更には皆で心を一つにして人前でお唱えする事は気力・体力・胆力も備わり本当に勉強になりますし達成感もひとしおというもの。奉詠を終えた講員さん達も安堵と達成感が混ざり合う、とても良い笑みを浮かべていました。

その後は宮城県石巻市法山寺の副住職である北村暁秀宗師のご法話です。

お話はこの度の震災での想像を超える悲惨な状況を中心に語られました。北村師の親友で震災により亡くなられた方のお話は、同じく震災で親友を亡くした私の体験と重なります。その親友との出会いは大学入学間もなくの頃、白紙のノートと睨めっこをしている隣の席の生徒に声を掛けたことから。授業は黒板も教科書も一切使わない先生の必修科目で、私が「どうしてノートに書かないの？」と聞くとその生徒は「私、耳が聞こえないの」と。それから私は授業の度にノートを録り、お返しに手話を教えてもらいました。そんな彼女と地震のあったあの日から連絡が取れなくなり、半年後にようやくご両親より亡くなったことを伺いました。彼女は保育園へ子供を迎えに行く途中で津波に巻き込まれたそうです。一番辛い思いをしている筈のご両親の前で大声で泣いてしまいました。今でも「障害は少し不便だけど、不幸じゃないよ」と笑っていた顔が忘れられません。直後は子供を残していった彼女の未練を想いましたが、今では子供の無事を喜んでいることだろうと感じます。

私には物資を送ったり募金をすることくらいしか出来ませんが、少しでも復興の手助けになるのなら何年でも何十年でも続けて行こうと思います。

この日の東日本大震災物故者供養法要では震災物故者のご冥福と、微力ですが今後も復興の手助けをして行こうと誓いを新たに、祈りを込めて追悼の「妙鐘」をお唱えしました。

今年、梅花流は六十周年を迎えます。歌詞の意味を理解し、味わいながら楽しみながらの詠道を真っ直ぐ進んで行きたいです。

第三代師範詠範会会長　佐藤仁鳳老師　逝く。

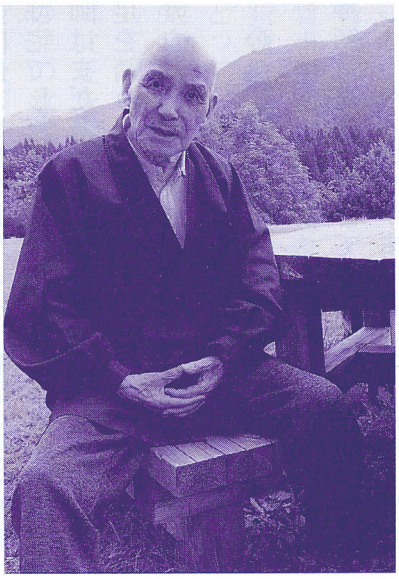
佐藤仁鳳老師の遷化に寄せて

第九教区　玉鳳院住職　柳川浩二

御老師は秋田県梅花流の最古参であり、梅花流発足時より敷衍指導教化に奔走し、また二期法要の大本山永平寺維那としてもその名を知られた眼光鋭い求道の老師でありました。

本葬儀は来年の法孫住職宗明師の晋山結制に併せて営まれますが、この度は御老師を慕っておられました玉鳳院柳川浩二老師より寄せられた追悼文を掲載し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

今夏猛暑の中、去る七月三十一日世寿九十四歳にて本宮寺六世・全応寺三十四世であられた善嶽仁鳳（姓・佐藤）大和尚様が遷化なされました。最後に拝顔したのが本年六月二十一日本宮寺七世の命日に拝登させて頂いた折りですので、それからわずか四十日目の事でした。お会いした時は、これまでと何らお変わりなく、帰り際には握手して下さいましたが、今にして思い返しますと、その時の握る力が少し弱かったかなとは思われますが、突然の訃報には愕然と致しました。



御老師は皆様御存じの様に、秋田県梅花流にとりましては欠く事の出来ない方で居られます。昭和三十年代産声を上げたばかりの「梅花流」（当初は“梅花流正法協会”と）に於ける県内最初の師範として御活躍を始められ、以後師範会会長を歴任されるなど、終始先頭に立って秋田県梅花流発展・普及の為御尽力下さいました。私に取りましては、昭和五十年頃から県北梅花流研修会で御指導を頂くようになりましてからの思い出が特に忘れられません。全くの初心者の私共を、御弟子さんの車で、手弁当で、無謝誼で年五・六回も御指導頂いたものでした。しかしそれをきっかけに、当教区の梅花流は飛躍的に勢いづき、設置講数それに師範・詠範の人数も他教区に抜きん出て充実致しました。この事は当教区に止まらず、秋田県の梅花流発展にも寄与出来た事は間違いありません。こうやって振り返って見ますと老師の御功績は誠に甚大なものを感じ、遅きには失しましたが、紙上を御借り致しまして御厚礼申し上げる次第でございます。

他方御老師は宗門の法式・進退・声明等に精通され、県内の先達として長年に亘り御指導下さいました。特に授戒会作法に詳しく、“良くぞそこまで”と唸らされた事しばしばでございました。私は平成十三年の大授戒会を発心致しました時、その企画段階から一部始終を御指導頂きました。お陰様で無事完戒出来ましたが、その時涙を流して、我が事として喜んで下さった御姿が忘れられません。

又この事も御存じかも知れませんが、御自坊・全応寺の前庭に（水琴窟）を製作されておられました。かなり御高齢になられてからでございましたが、裏山から水路を引き、穴を掘り、瓶を埋め、全て御自分の手で成し上げられたものでございました。全てに完璧で、窮屈に思われる所もございましたが、このように充分な遊び心をも持ち合わせておられました。

化を他に遷された今、御老師には我が粗意を無底の鉢中に供え、大寂定中品位を増崇し奉らん事を御祈念申し上、その大恩に報いんとさせて頂きます。

合掌

梅花のふるさと

武士の心と道元禅師

～詠讃歌の生まれた風景〈その十四　梅花・高祖一番〉～

鎌倉　下向

高祖承陽大師道元禅師第一番御詠歌

荒磯の波も得よせぬ高岩に
かきもつくべき法ならばこそ

道元禅師和歌集

◇惨劇の跡地へ◇

時は鎌倉時代、宝治元年（一二四八）六月、荒くれ武士達の都・鎌倉に血の雨が降りました。それは源頼朝公を祀る法華堂で起きた惨劇でした。開幕以来の雄族・三浦氏一門がそこへ追い立てられ、五百名にのぼる人々が自刃し果てたのです。豪傑で知られた三浦三兄弟のひとり光村は、死後さらし首になるのは耐えられぬ恥と言って、おのれの顔を刀で切り刻み人相がわからぬようにしてから切腹したと伝えられています。

世に「宝治合戦」として知られるこの事件、三浦一族をせん滅した相手方の首領こそ、時の鎌倉幕府執権・弱冠二十歳の北条時頼（ほうじょうときより）でした。北条にとって三浦一族は、ともに幕臣として鎌倉を支えてきた間柄でした。殺された中には、時頼の義理の父（妻の父親）もいたのです。

この惨劇の直後、時頼に招かれて遠く越前の山奥からやって来た一人の禅僧が、道元禅師です。道元禅師は約半年を鎌倉で過ごすことになりますが、その間住まいしていたのは、名越にある在家信者の邸宅でした。そこは法華堂に至近の距離。道元禅師はまだあたりに血の臭いの立ちこもる戦場跡に足を踏み入れたのです。そしてその招待者が、ほかならぬ殺戮の首謀者であったのです。

◇鎌倉と道元禅師◇

道元禅師は鎌倉に対してどんな思いを抱いていたのでしょうか。禅師がまだ若い頃、新しく僧堂を建立するために浄財の寄進を募っていたことがありました。その時禅師に「鎌倉は今新しい都ができて大変な勢いです。禅師様がそこへ赴かれて布教されたら、きっと大勢の人が寄進に応じることでしょう」と勧める人がありました。これに対して禅師は「いや、そうではない」ときっぱりとお断りになりました。教えを求めるならば、向こうから訪ねてくるべきである、というのがその理由でした。また新興の都としてにぎわいを誇っていた地へ近づくことは「道を求めるものは好んで深山幽谷に住み、都会の喧騒を離れるべきです」という本師・如浄禅師の教えに背くものでした。

その鎌倉へどうして禅師が行かれたのか、その理由ははっきりしていません。長い間禅師に帰依し、その活動を支えてきた波多野氏が、時頼の要請の仲介として熱心に働きかけたことが、その理由の一つと言われています。

一方の時頼はなぜ禅師を招いたのでしょうか。時頼は、これまでの貴族政治とは違い、新しい武

合戦絵巻より〈首を切りとる場面〉

北条時頼像

士の時代には禅の教えこそふさわしいと考えていました。そして自らも敬虔な仏教の信仰者であり禅に対する造詣も深いものがありました。さらに鎌倉に新しい時代にふさわしい禅寺を建立する計画がありました。その禅寺とは、宝治に続く年号「建長」の文字を冠した「建長寺」です。

しかし権力者や名誉・利権に近づくことをよしとしない禅師は、時頼が再三勧めるこの申し出を「私には越前に小さなお寺がありますから」と、お断りになったのです。それでもなお禅の教えを求める時頼に対してお示ししたのが、

〈荒磯の波もえよせぬ高岩に
　かきもつくべきのりならばこそ〉

という和歌でした。この年、禅師は四十九歳、時頼よりもほぼ三十年ほど年かさでした。

この和歌には、凶暴な王権を掌中にした若き執権、同時にひたむきに教えを乞う熱心な禅宗信者という両面をあわせ持つ〈北条時頼〉という人間に対する、禅師の思いが潜んでいるようです。

◇もののふの心に◇

宝治合戦の舞台であり、また禅師の仮寓した地は、鎌倉市由比ヶ浜に連なる海浜地域です。磯に寄せる荒波や高岩に取りつく牡蠣は、そこに住む人々にとって、見慣れた景色だったのでしょう。

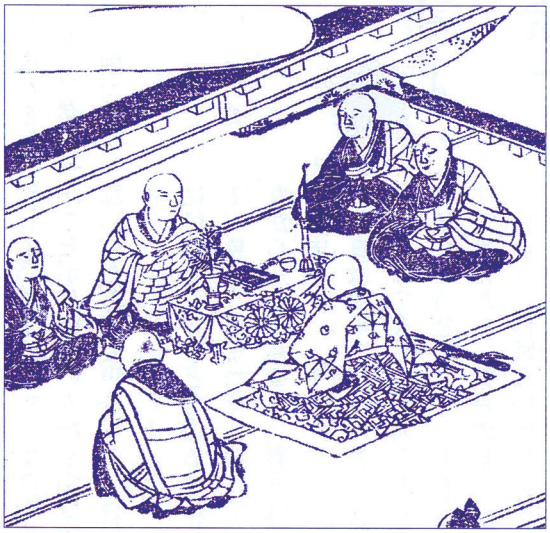
この地にあって禅師は、仏典からある物語を抜き書きしています。それはアジャセ王という若い王子が、父王を幽閉し餓死させて王位に就き、しかしその罪の意識に激しい頭痛に苦悩するというくだりでした。それはあたかも、義父をはじめ親しい人々を殺害した果てに、執権という名の王位に就いた時頼のことを暗示しているようでした。

殺生という大罪を犯しながらも、時頼は禅師に禅の教えを求め、豪壮な伽藍の開山となることを勧めるのです。禅師はこの人に対して、いったいどのような教えを説くべきか、当惑されたのではないでしょうか。後に永平寺にお戻りになった禅師は、この時のことをこう語っています。

「私は鎌倉の人に対してただ、“修善の者は昇り、造悪の者は堕つ”と説いてきた」のみと。

善を修するものは天上や人間界に生まれ、悪をなすものは地獄に堕ちる、と言うのです。これは一介の禅僧が、時の権力を極めた執権・時頼に対して言った言葉とすれば、非常に勇気あるもの言いであり、ことによってはとても危険なことでもありました。おそらく禅師は命をかけて時頼に向き合ったのでしょう。

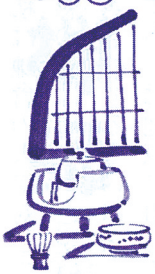
「荒磯の波もえよせぬ高岩」とは、正気の沙汰を見失ったもののふ（武士＝時頼）の心情に託して言ったものではないでしょうか。しかしその到底手の届きそうにない所にさえ、仏の教え（のり＝法）は必ずや届くはずなのだ、という切なる弘法の思いがこの歌にはあるようです。下の句を散文調にすれば、「のりならばこそかきもつくべけれ」となります。「仏の法であるからこそ、時頼様、あなたの荒んだ心にさえ、きっと教えの真実は伝わるはずなのです」そんな禅師の思いが、この歌を支えているのではないでしょうか。



曹洞宗の伝承では、時頼は
道元禅師より受戒している

みんな！梅花やってみネイガー

おらほの梅花講



龍沢山（りゅうたくさん） 福寿寺（ふくじゅじ）

住所　北秋田市小又
設立　昭和五十三年
講長　奥山　謹英
講員　二十六人

福寿寺梅花講は昭和五十三年に始まり、これまでの講員登録者数は七十八名となりました。改めてその名簿を見ると、「あ、この人もいたんだ」という発見があります。

開講当初は講師の先生に浄福寺方丈様をお願いしておりましたが、その後は寺族である母が、講習会などで習いながら指導をしていたそうです。現在は毎週月曜日午後から十人位がお寺に集まって練習をしている他、地域の集会所に集まる別メンバーの練習も行われています。

年間の行事では、三仏忌（花祭り・成道会・涅槃会）や六月下旬に集落の地蔵堂に行ってのお唱え、高齢者施設への慰問も兼ねた施設に祀られている観音様の前での奉詠と一年を通して色々と行っております。

私も昨年から宗務所の梅花流指導者養成所の講習を受けながら、福寿寺梅花講員ナンバー78として練習に参加しているのですが、「チン　トーリン　リン」のリズムを子供の頃から耳にしてはいたものの、聞くとやるとは大違いで「カチッ　トー　チリリン　チリリン」と聞き慣れない音を響かせながら苦戦をしております。練習は前半しっかり、後半賑やかに和気あいあいとした雰囲気でおこなっています。

開講から三十数年が経過して練習に来る講員さん方も大分入れ替わり現在は、『福寿寺梅花講シーズン3』といった面々になりました。お唱えの上達はもちろん大事ではありますが、「お唱えすること」を大事とするのも梅花への接し方の一つではないかと想います。梅花を始めたキッカケは様々でしょうが、楽しみながら続けられるようにと願っております。

福寿寺梅花講員　奥山一英

おらほもやってるよ

「琉璃（るり）の会」

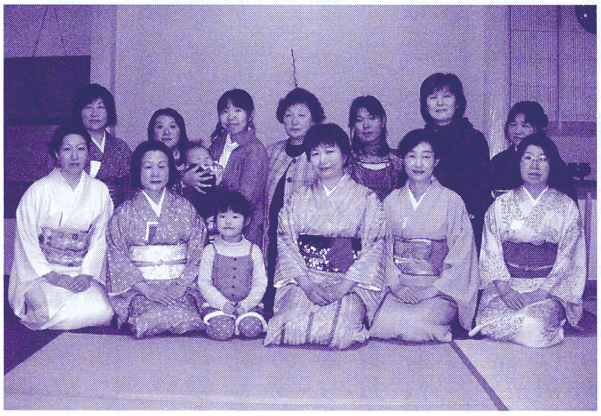
私たちは十八教区詠範有志の勉強会「琉璃（るり）の会」と申します。「達磨大師御和讃」の三番「琉璃紺青の中空に」から名前を頂戴しました。詠範さんたちの中から、気軽に梅花を学ぶ機会が少ないとの声が上がったのをきっかけに、有志が集まって平成二十一年十月に設立しました。

毎月一回、金曜日の二時から五時。留守番で出掛けられない詠範さんのお寺に押しかけて勉強することにしています。最初の半年は、指導を上級の詠範さんたちにお願いして、定番の曲や合唱曲などを練習しました。

二十二年四月からは、複数名の指導者をお願いし、コース分けをして本格的な勉強を始め、それぞれ検定にも挑戦しています。また、まだ梅花に触れたことがない若い方たちや自坊に講のない方たちにも声をかけ、会員数も十名から十六名に増えました。お母さんに付いてくる子ども達も仲良しになって、見よう見まねで一緒にやったりしながら、いつも楽しい雰囲気で勉強しています。

写真は去年の三月におひな祭りのお茶会をして楽しんだ時のものです。このほか、寺族としての心得などを少しずつ学んだり、結婚讃歌の合唱でお祝いしようと結婚式に押しかけたりと活動の幅を広げています。

文責　佐藤光月



歌と言葉の力

～絶望を希望の光に変えて～

東日本大震災が発生して早くも一年半が過ぎようとしている。

「三・一一」のその日、海岸から、川沿いから押し寄せた濁流は街を呑み込み林を駆け上がり高台に至るまでの人々の生活をさらい尽くした。数え切れないほどの多くの命が、その家々が、ぬくもりと想い出の刻み込まれた故郷が一瞬にして失われた。

日本中から自衛隊及び多くのボランティアが支援と復興の手を差し伸べたが、失ったものは大きく、えぐられるように空いた心の穴は埋まることは無い。命は草露のごとく、この無常のことわりの前にただただ立ち尽くすのみである。

震災後、しばらくしてラジオにアンパンマンの歌が流れた。

＊そうだ　嬉しいんだ　生きる喜び
たとえ胸のきずが痛んでも　何の
為に生まれて　何をして生きるの
か　答えられないなんて　そんな
のはいやだ　今を生きることで
熱い心燃える　だから君は行くん
だ　微笑んで＊

アンパンマンはどんな困難にも負けず立ち向かう。困った人がいれば助け、お腹の空いた人が居れば顔を食べさせる自己犠牲のヒーロー。はかない命だからこそ、精一杯今を生きよう。愛と勇気を持って頑張ろうという応援歌であり、このアニメの主題歌で被災地の子ども達は元気を貰い、大人達は勇気づけられた。

リエ＋ノリシゲの「歩きましょう」という歌がある。

＊色失ったこの町の　瓦礫かき分け
て　泥にまみれた荷車　押す背中
照らす太陽（中略）
肩寄せ合って越す夜に　ともす月
明かり　行く先わからぬ　私でも
この命あればこそ（中略）
ああ強い風よ　過去も未来もどこ
へ行ったのか　それでも笑い合え
る　仲間が居る
さあ　歩きましょう　歩きましょう
思いで集めて
さあ　築きましょう　築きましょう
愛するこの町を　共に　歩きましょう＊

淡々と島唄風に続く優しいメロディーと歌詞は語る。失ったものは取り戻せないが、この命ある限りみんなと共に「また一から積み上げ築いていきましょう」と背中の後押しをする。感涙しました。

春の選抜甲子園では石巻工業高校の選手宣誓に感動させられた。

「宣誓。東日本大震災から一年。日本は復興の真っ最中です。被災をされた方々の中には、苦しくて心の整理がつかず、今も当時のことや亡くなられた方を忘れず、悲しみに暮れている方がたくさんいます。人は誰でも、答えのない悲しみを受け入れることは、苦しくて、つらいことです。しかし、日本が一つになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています」（後略）

被災者でもある石巻工野球部員も、答えのない悲しみを背負って、諦めず全身全霊でプレーする。それは亡き人への鎮魂と、支えてくれる人、今ある命への感謝と、そして日本中へ勇気を届けるために。私達はもらった感動を希望に繋げていけるのだと思います。

今春梅花流では新曲「道心利行御和讃」が発表された。震災後の「向き合う、伝え合う、支え合う」をテーマにしたこの曲は人々の絆と利行の実践の大切さを歌う。

悲しみの人々に届くのは歌であり心のこもった言葉である。それが心の底に響いたとき感動が生まれ、絶望から希望に繋げていくひとすじの道ができる。

私達も梅花流詠讃歌を学びながら、悲しみの中に希望の光明が見出せますように思いと祈りを込めて唱えていこうと思う。

テレホン梅花

☎〇一八―八七三―七六七六（ハナミ ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります）

平成二十四年

◆十月六日　達磨（和）
十三日　廓然
二十日　永光（総持）
二十七日　正法（和）

◆十一月三日　修証義
十日　四摂法（和）
十七日　開山忌（和）
二十四日　真清水

◆十二月一日　明星
八日　高嶺
十五日　御授戒（和）
二十四日　浄心
二十九日　月影

平成二十五年

◆一月五日　観音（和）
十二日　慈光
十九日　良寛さま
二十六日　聖号

◆二月二日　法灯
九日　涅槃（和）
十六日　不滅
二十三日　浄光

※ご意見ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇―〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八―八七三―二六七五）

梅花行持ご案内

■県南・中央地区梅花流奉詠大会

日時　十月十四日（日）
会場　大仙市　大曲市民会館

ついに県南では初めての大仙市での開催となりました。県南地区では、古くからの念仏講が盛んで梅花流詠讃歌は　なかなか認知されず梅花不毛の地とされていましたが、この度梅花流を広める活動の一つとして、梅花流詠讃歌の親しんで頂くべく開催の運びとなりました。

内容は「梅花流詠讃歌への誘い」と称して従来の登壇奉詠に加え詠讃歌を物語仕立てで感じていただこうと考えております。

中央・県南それぞれの地域からの参加者の皆さんは、梅花に興味のあるご近所のお友達を誘って頂きご参集して頂ければと思います。県南地区に梅花流の花を咲かせるべく、梅花講員のみならず多くの一般の皆様方の参加をお待ちしております。

■禅センター梅花講習

【檀信徒講習会】〈午前十時半～午後三時〉

九月七日（金）課題曲　彼岸御和讃　香華
十月十二日（金）課題曲　菩提　暮古
十一月九日（金）課題曲　無常御和讃　月影
十二月十三日（金）課題曲　正行御和讃　明星
二月八日（金）課題曲　同行御和讃　道交
三月八日（金）課題曲　誓願御和讃　慶祝御和讃

※課題曲を確認してお気軽にご参加下さい。
初心者、上級者の二会場にて。受講は無料です。

■檀信徒講員一泊研修

◎県　北　地　区

日時　十月三十一日(水)～十一月一日(木)予定。
会場　鹿角市恩徳寺様にて
宿泊　姫の湯ホテル
～以上の予定で、内容は計画中です。
※会費、詳細、日程等は決まり次第各講長さんを通じてご案内致します。

◎中央・県南地区

※日程、会場は今のところ未定です。

検定会のお知らせ

～24年度課題曲決定～

平成24年度の秋田県の梅花流検定会を開催いたします。新しく入講された方はまずこわがらずに、堂々と習ったことをして頂ければと思います。基本作法を丁寧におこなって元気にお唱え下さい。ひとつひとつ階段を上って行きましょう。ロンドンオリンピックは終わりましたが、金メダルを狙ってプレッシャーを感じるより、まずは予選突破という気持ちであたりましょう。結果はきっと後からついてきます。

課題曲の中から数曲選びましたので、各曲のポイントを押さえながら練習を重ねて検定に臨んで下さい。尚、見台、イス、机をご使用の方は申し込み時に記入のこと。

【日程・受付 9時 / 開講式 9時30分 / 検定開始 10時】

■県　北　検　定　**9月28日**(金)　/　会場「北秋くらぶ」
大館市幸町15-6　☎0186-42-2033

■中央・三級検定　**11月16日**(金)　/　会場「さとみ温泉」
秋田市添川　☎0188-33-7171

●詠範（寺族）検定課題曲

補　教	正法・四摂法・紫雲（高祖）より２曲。
詠範補	浄心・梅花(高祖１)・入寂(高祖)・誕生(太祖) より２曲（※和讃は立行）
五級詠範	渓声（永平１）・観音・慈光・月影より２曲（※和讃は立行）
四級詠範	歓喜(第１)・明星・涅槃・高嶺・妙鐘より２曲出題（※和讃は立行あり）
三級詠範	紫雲（釈迦）・慈光・廓然・法灯・妙鐘・同行・慶祝より３曲出題（※和讃は立行・分節詠唱あり）

●檀信徒検定課題曲

教　導	三宝・正法
権正教導	聖号・修証義
正教導	浄心・紫雲（釈迦）
権中教導	梅花（高祖１・太祖２）・誕生（高祖）より２曲（和讃は立行）
⇨中教導	渓声（永平寺１・総持寺２）・菩提（高祖）より２曲（和讃は立行）
権大教導	入寂(高祖)・法灯(太祖)・無常・月影より２曲出題（※和讃は立行あり）
大教導	歓喜(第１)・涅槃・不滅・慈光・地蔵より３曲出題（※和讃は立行あり）
三級教範	紫雲(高祖)・梅花(高祖２)・渓声(永平寺２)・廓然・讃仰(高祖)・法灯(高祖)妙鐘・慶祝より３曲出題（※和讃は立行あり）

※中教導合格にて水色の房に変わる。

同行読者の皆様へ

この度は二十四年二月号が遅延休刊となり関係者並びに講員の皆様に大変ご迷惑をお掛けしました。心よりお詫び申し上げます。

編集　亀谷